

とありければ、實方之れに返歌して。

留まらむ事は心に叶へどもいかにやせまし秋の誘ふを

此の外にも許多ありつらむも、盡くは残らず、家隆への返歌によるに、聊も朝廷を恨むる所なく、秋色の誘ふに任せて東に下れる由を述べれば、阿古耶の松にあこがれて、下れるものとやいはむ。秋風に誘はれての東下り腸斷たむの思ひはありけむを、唯秋の誘ふに任せたりとのみ他に及ぼさりしは、いへるに増して哀れなり。

行き行きて別れ路に逢坂山も打ち越えぬ。滋賀の浦浪立つも見つ。勢多の唐橋からころと、馬の蹄の鳴らすにも、如何に鳴海の濱千鳥、鳴く音を聞くも中々に、袖濡せとや宇津の山、遠き砦も今日許り、興津の濱に打ち出でつ。清見の月も曇りては都の空の懐しく、富士の煙に咽びつつ、歩めば何時か足柄の、山も越えけり早川の、早くも年は暮れ果てゝ、それとし人も白河の、關路に春は陸奥の異なる境に着きましぬ。此處か其處かと歌枕、阿古耶の松を尋ねても、更に其の甲斐御座さねば、來し方許り傳ふ山、信夫の里も後にして、板谷路越えて米澤も後へに見れば、程もなく、大沼といへるにかかり給ふに、こはそも如何に、天の成せる勝地とはいへ、周り一里もあらむかと思はるる清水の漫々と湛へたる沼ありて、風の隨々、往來ふ嶋の面白く、數ふ

ともなく數ふれば大小合せて六十六嶋あり、風なきも岸を離れ、浪なきも游泳せる様、此の世のものとも思はえず、恰も物のありて嶋を弄ぶが如く、小松、鴈鴨も藤波も、色を爭ひ、穂に出ぬ尾花も打難れるに、興がらせ給ひ、

よしやそも名こそ深山の奥なれや花にはもれぬ雲の上かな

と一首を遊ばしたるに、俄に水の沸き溢れて、天に漲るかと思はれ、數多の嶋々東西南北へと意に任せて其の狀、織るが如く編むが如きに奇異の思ひをなしつつ、

四方の海波靜かなるしにや己れと浮きてめくる嶋かな

と又も一首を詠じ給ふに、さしもに恐ろしかりつる沼水の、見る間に収まりて鏡の面よりも滑かなり。其の折り廻れる波の溢れて松の枝にかかり、根を洗ひたれば時人「波揚の松」とて今の世迄も語り傳へぬ。實に「和歌は目に見えぬ鬼神をも感ぜしめし例しにや。

それより名にし負ふ象瀉を志して進まれけり。此程の事にや。陸奥の任に侍りける頃五月迄で時鳥を聞かぬよしを、都の方へ申し遣はすとて、

都にはさきふりぬらむ（十六夜の記には「ふるすむ」）時鳥關のこなたの身こそつられ

とありければ詠人は知るを得ざれど、其の返しに